



玉珠小抄







源氏物語玉小櫛補遺下巻

初音巻

鈴木服著



けさうとまふはげこそ 三のひら けふは句きうーるころー

哥 ふる人よ 四のひら みるは種る小古るを兼るるあり。 五のひら 種歴六年月をうけ。 六のひら 四古る

初音小対へ

物まめやうに 七のひら き提 八のひら 昔陸宮のたゆまあり。 九のひら 戯まうくいひか

ーるあり

さめく 十のひら さひとけるたぐふ。 十一のひら 万葉あままぬのためくしづこ

いふよ 十二のひら 志あーたるよろあへん 十三のひら 同 下よだいでのおざりのそのはあつふ

ーまひーるあり。 十四のひら そまなよかくあまーあるべー











つゞくことえ終る同 左 こそまきまづべし。もあつとはだつれとをつづけて  
よむべし

いふ小せんとおぼえて 世のむら 右 おぢーてあり。おぢえはあやまらあり

巻卷

くふいめづいふまう九のむら 左 湖月九のむらの

句九のむらの

せうくの後上人土のむら 右 せうくまかろう。あましくこりふがぬくある

べし。又いふましく世のむらをせましくとせしむるを。假名よかくうつ世のむらひがぬくある

むしづくま世のむらく 右 んはげ世のむらく。おぢよんく。おのがぢく。とあり

をまのがを世のむらおと。ま世のむらくをま世のむらくは。張するあ世のむらん。だて世のむらる。おまむま世のむら

こまうと上のふあさげある人。まは祿ども。おま世のむらうにた世のむらり。れ

人とをうけていふ。小楮の二の巻よ。げ世のむらの。後ある。得世のむらき世のむらり

いけるま世のむらり。よ世のむらて 同 左 一本よ。いつたるま世のむらり。とあるを世のむらり。とすべし。

又よ世のむらて。向世のむらきの。ま世のむらり。人の。よ世のむらて。ま世のむらり。べし。

ふふ世のむらる。ま世のむらり。て。か世のむらづ。れ世のむら。と 同 藝道の。ま世のむらり。小楮の二の巻。小

こま世のむらり。ま世のむらり。あ世のむらや世のむらま世のむらり。れ世のむらり

人の。う世のむらて。い世のむらま世のむらり。た世のむらら世のむらり。あり世のむらたり 世のむら 右 夕暮の。ん中世のむらの。廻世のむらく

その。お世のむらひ。出世のむらる。お世のむらぢ。え世のむらん。が世のむらり 同 湖月師談世のむらり。お世のむらぢ。え世のむらよ。向世のむらきの。ま世のむらり

け世のむらへ。あ世のむらら世のむらび。あ世のむらよ世のむらり。と 同 左 あ世のむらら世のむらよ世のむらり。と。よ世のむらむ世のむらべし。と。ま世のむらり。ま世のむらり。あ世のむらり。あ世のむらり

と。ま世のむらり。ま世のむらり。よ世のむらり。の。ま世のむらり。と。す世のむらべ世のむらし。あ世のむらり



常復巻

とろろよおほとあぢいものなる七のむら 一本よまのむらうとあぢい七のむら  
ざえき人よあんちぢぬ十のむら かん十のむら 小様よてなをばと  
えられとるいたぐ十のむら

ものえうーたつき十四のむら たつたたまを深きなる十のむら

人うもむらうちくまはあひびもあじん十五のむら 上よ人十五のむら

もとひて又はあまひどわとひあじん十五のむら 上よ人十五のむら  
おちあやまうあどあぢい

あしあまなる十八のむら はんを深きなる十八のむら

のころおやうりぢ十九のむら 里もとてきはんあやまう十九のむら

篝火巻

けおのこそと二のむら 小櫛小いれつとく一本よとも一か

うち松三のむら 玉小様三のむら 嘉基云落くが物語二よさいねのすけ三のむら

とあまさいサキ 松よて今りかひりねありこれもそまてと国トく  
さいねあるべーをりねうち松ともよ折を折とも打とも深きなる

野分巻

あぢきあく田 なる田 となるよてきなる田 あちたあくよてす  
きるべーとま下のうつとくくまありさそんてまのわ  
とつとくあり

おん八のむら ぼん八のむら を深きなる八のむら 何れをあてあや



さして思ひ出でんまばいりよきあり

まじりてうらうらもまおのりず 九のむら 右 まおのりてうらうらもまお

ろけを多くいふほどよまていあぶるをくく

ひぐさくまやまたん 三十八のむら 右 是ハ例の作者の界下よて、秋の日はれをこ

とわくさるあり。上の哥をにくたものことひなるよ一ひがくこと

傍り侍る若の保つまにうこつけらるあり。注得せり

行幸卷

かくおがーくくぬみあく 二のむら 右 上の巻のまのまをうける詞あり

おんたふさうらうちうこて 三のむら 右 一本いさうてうらうちうこてあまのり

のうさうひんよすぢれある 十六のむら 右 さいふひんよすぢれある

人よほらさるまら

のうさうひんよすぢれある 二のむら 右 一本は下よてあまのり

をとあるぞよれ程あふよをもトの下よどもトあちうら

とよへ形似るなよおちうらあんとどもトあちうら

いさあり

宮つらもこいそだおまけ 八のむら 右 女中の四方へあうた

いさあり注さる

うたれいそむも 同 左 花の内説のうらうらよの保つまをの保あり

みこさちつきくのらく 十五のむら 左 みこさちハ親王方あり。傍注ひがみ

後序卷



物もあゝぬらんち 右 四のむら 然りてハえあるまゝ一ねらんちえあゝぬのえおち一々  
 してもあや一うもてもあまぬゆの 左 五のむら 花のは説一う一  
 とうり 右 六のむら 流ふよてとこ切ら一  
 出まひてゆくつとあどすえ 右 八のむら け廻つてたいとあり保あま一い出  
 ふまとあ一う又ハすえまふハす終とあ一う  
 一やあどの 右 八のむら まんトハ意ト一うさてち人ハ玉蔓  
 君をいふあり

の終ふ一たの 九のむら ののふハ上つけてまゝおあり 潮月の句一う一  
 終く一ういハあう 右 十のむら るハを 左 十のむら 保あま一う  
 さこえぬ一とを 右 十三のむら 一を 左 十三のむら どの保ありまこえぬ一とまで 円大長消名の

こくをあり

植柱巻

こら思ひまづめつ 右 十のむら 一本 左 十のむら 一  
 か 右 十三のむら 一 左 十三のむら 一  
 人 左 十のむら 一 右 十のむら 一  
 愠の字をあつ 右 十のむら 更 左 十のむら 一

はめの 左 十三のむら 一 右 十三のむら 一  
 一 左 十のむら 一 右 十のむら 一  
 はめの 右 十三のむら 一 左 十三のむら 一  
 一 右 十三のむら 一 左 十三のむら 一







以下小どもトふくてハ詞々のもぢ

人又えよくれふつきさうへる人 十二のひら 俗よちとねもよありよくい守か人

りふがごご

十三のひら 老木とハ三条宮をさしての終へるあり細のは説くちぬん

よふかごご

られうまれみーきをまじり 十六のひら こころをさるべーうまれよてまじり

ろー錦をもみぢのうーきをあり毛をさる後よつげふむ耐を上のう後

よハうーきをさーれと綱重をうて文つごち

上若菜巻

おがつろあくひんおがえ 十六のひら ますふのふをおとせり

さーつぢよ 廿四のひら 五代をつげのハ昔よりひくけり

さらくーくおぼーたりつるよ 四十三のひら おがーハおがえを誤まるあり

こそ必紫のは自のふをのめ入る秘あるをよはんよまきとあるよて源

のはゆのゆーもまきいぬまどごもはよあーびきさてハ上の綱はめおれて

とあごぶきをまぢ

えこまぢのさず 四十八のひら 上よんくーびとさう終ともあつてん終つゆ

の得あるまぢーまさまよんえぬふとあり

おーやう 五十三のひら この詞はゆがーハ源おちまぢのあふも

はーやづくふもものさうり 五十五のひら 女清あーといふとハとありハ源氏君との内中も手ハとよん

五十五のひら



花盃の注ぎあやまらあり  
 俗よ一ツをとりては一回  
 上のきこもゆゑはさうけて一ツをそれあよとりけるあり  
 九十の節  
 此の年比してむすこも  
 百十の節  
 くれをとりよりあしん  
 初めりかくて人よまきとぐくもまよて大方よんけいこあり  
 人よまきとぐくもあしんしむけはひあこ  
 目  
 白ひころを傍注よ梅香と  
 ちも一をちとせまあり

下若菜卷

ちも一をちとせまあり  
 右  
 ちも一をちとせまあり  
 右

花の注ぎあやまらあり  
 右  
 ちも一をちとせまあり  
 右  
 えあしんしむけはひあこ  
 右  
 せらまらりしんしむけはひあこ  
 右  
 ちも一をちとせまあり  
 右  
 我ららあぐべき限あくあしんしむけはひあこ  
 右  
 一もつてはむべし限あくあしんしむけはひあこ  
 右  
 書中よあるは一回あり  
 五十の節  
 けしんしむけはひあこ  
 右  
 まぐれあしんしむけはひあこ  
 右



くまのいこまゆの〜 同 翠をたへおほひてのみくあり今もまよはぬめり  
て休ま〜免後へ〜あり

ま〜づふも〜あり 六十四のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 七十一のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 七十八のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 八十五のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 九十二のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 九十九のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 一〇六のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 一一三のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 一二〇のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

女の身ま〜あり 七十四のむら 左 傍注ひがゆ〜ありこれいすべての女れ身をのほへる

よ〜のいよ〜あり 八十一のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 八十八のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 九十五のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 一〇二のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

〜のいよ〜あり 一〇九のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ

柏木巻

〜のいよ〜あり 一一六のむら 右 なが〜しり〜の俗よらちがあらぬまよ















うまにーちまを六のひら 一本よろかじーちまをーあるぞよた

そのもれたらどもありあつか十のひらー

ちまをー

いーちまを十のひら ちまの徳あり

小ぶきやうはじんや同けやハ詞の中らよある疑ひのやあり下のふ

うはじんよーちまをー

はのせよハ二のひらーちまを十八のひらーちまを十のひらーちまを十のひらー

かのせまものよろあひ廿二のひら 一本よろあひーあるぞー

白宮巻

ふーちまを二のひらーちまを二のひらー俗よきふひーちまを二のひらーちまを二のひらー

ちまをー

うちまをひひるあーちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらー

よーちまをー

ちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらー

あつて小まをちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらー

中小つた十六のひらー一本つた十六のひらー

竹川巻

ちまを十のひらーちまを十のひらー傍注十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらー

ちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらーちまを十のひらー

袖奇ちま廿のひらありやハ廿のひら 一本ありたやーあるまを十のひらーちまを十のひらー



これぞさしでもありあらん

哥  
云云  
左

廿四のひら 丹羽屋云 結句のしもいふとあはるべし ちよんをうつはあは

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし 廿六のむし

あふんをきよあはるべし

紅梅卷

あふんをきよあはるべし 廿七のむし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし 廿八のむし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし 廿九のむし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし 三十のむし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし

あふんをきよあはるべし



橋姫巻

おのゝかよすけまさり三のむら 終よ句さほらち

とりかたあり六のむら 終よこの終もきり

こころのおきてやいろも七のむら 終よそきりてやもとの句

をけづる

えおもひすてぬとあん同 とあんの上よゆもころも詞をあめ

てらほづれば次よあげきほりもふとありすべてとも

の上よきりて細あり定まらぬまじりつてく細よりけ

るもあまき大いけいんひのふくころもあまき

みうどはちこつてよても十二のむら 終よ文もあまきそのおよも

げよきりてふもあまき十のむら 終よころもの句をけづりてこ

きり

月かりに終よ九のむら 終よこの句をけづりて次のありてよてき

ぞれちり

六のむら 大君と中君とのけくひも終あほいへるとあうらうか

ハまきいり

女むのちくちのきを五のむら 終よ女ばら一平よ女づりてある

又ゆる四のむら 終よふる例のふを得ま

彼名のかつた三のむら 終よ小極よ云とあまきと今あまき

柏木君の自つけまへ二のむら 終よおしも上といふも











そまきく結くいふゆゑ

いひまゝのしめ結へり同一本よきあり結へりとあるとあり

とくくつづう右一本は下よかそり右さもといふ有

いと心づく右まんとと思ひ右も乃を右大君の家内身の上

よてかゝるめをばみとおぼくきとありされば次よ身よなり

てままこの結へり細の内教めうあり

かやうのさうありともま左湖月倍注師説う

ままあり右一本れいのさまよありてとあるとあり

くちよ思ひ結するふ念いすゆる同くちよあり他なさくち

くちよとあるもあり誤あり念とハ大君のつきをねんのをよ

びりん世もあんと念いつまつをり

足るまよおのれれやうま右是うり子の地とるべい

上よどもいからる念いさでハ意君のん中の詞と子の

地といふあり

あいのころまま右下のんとハ意君の下のころあり下のたど

うち侍ひてしらはかへて下のんにさるおもたど大君れのこ

ままひーやうまてままといふころあり

こののかくころひまうてま左殿ののもトのてよをは

のこのひのま思ひきこえんよかくまきこえんハ又ゆ思ゆのれ

あれのもーをうけてのころ















いしあーきりひしよは信る。 廿九のむ 左 三例のむの信あり

又け人よんてなてまつしんをひひやるもん 廿のむ 左 け人ハ白雲をひき

傍注薰君とするひびごころあり

おのづからあるまを 廿二のむ 右 へいよちち得をよとあり

まをの二もをを 廿三のむ へいよちち得をよとあり

あり

ちうらよびよせてとぬ 廿四のむ 左 三例のむあり

いしあ 廿五のむ 右 是もなを

上のうらめ 廿六のむ へいよちち得をよとあり

しんのも

かく 廿七のむ 右 へいよちち得をよとあり

ひ 廿八のむ 左 へいよちち得をよとあり

とカよつけてあり

蜻蛉巻

物も 廿九のむ 左 へいよちち得をよとあり

下す 三十のむ 左 へいよちち得をよとあり

ま 三十一のむ へいよちち得をよとあり

ま 三十二のむ 右 へいよちち得をよとあり

ま 三十三のむ へいよちち得をよとあり

ま 三十四のむ へいよちち得をよとあり











いもろとあるべし

のほひもあたませげあうふくろこをまゐん 五十五のむら 左 ともし 衍あまし

いのちハ葉のうすきぐご 五十六のむら 右 この作者詩の心をとりあや

まうぬくええくろ命の落きこいもとすくせのいあはるをい  
るあり

いもろとあるべし 六十二のむら 左 嘉基云こを紀伊さう妹あるる論を記を

小根は尼君の妹あゝんとあるいいう女どらの兄才ハ姉あゝと  
くくそりいもろとあるいいう男の方より女の兄才をいふ詞  
ありといは大人も漏らひいおきくしりあるをや

すてのちも 六十八のむら 左 昂云きこえてほもあまべし中宮あり

多浮橋巻

すけせめいこつてまつていもい 七のむら 左 例のまをあや

まもるあり

玉小搦補遺下巻

右記在大人の玉小搦ハ成はてざる由まで後の補ひをまこる心ある  
り真由といひたたるがゆいおのき今を志をつとてかくおし  
も程たぐくそびよて更なたりとくいふべくもあらずえより  
をぢあきごとと暇もあき程のちりごまありまれば程後の  
人の緇ひ又正しをまつんぞ

終本眼



文政三年庚辰春  
新刻

尾張  
波索係屋藏板



